

幼児に新しい言葉を教えるときには、実体に即して教えることが望ましいでしょう。というのは、「実体」と「言葉」と「漢字」の三者を結び付けて記憶に刻むことこそが、言葉の学習では大切なことだからです。

「言葉」は「実体」を思い起こす“聴覚的信号”であり、一方「漢字」は“視覚的信号”に当たります。実在するものに触れるたびに、体験するつど、これを言葉と漢字の両方で表現して示すことが大切なのです。というのも、視覚による記憶のほうが聴覚によるものより強いのですが、それを両方でやれば効果が一層強まるのです。

たとえば「学問、音楽、学校、楽器」と表記すれば、「学問」と「学校」、「音楽」と「楽器」が関連することはすぐにわかります。しかし、これを「がくもん、おんがく、がっこう、がっき」とひらがなで表記するとどうでしょう。音が同じですから、「がくもん」と「おんがく」、「がっこう」と「がっき」を同じ仲間として子どもは関係づけたいくなるものなのです。「おんがく」は音の学問とか、「がっき」があるから「がっこう」とか、このような誤解を生じさせてしまう危険性があるのです。

また牛乳のパックには「牛乳」と書かれていますが、「牛乳の『牛』という字はうしとも読むし、『乳』はちちとも読むのよ」などという教え方をする

のは避けるべきです。実体に即して、動物の「牛」が出て来たら「うし」と読み、「牛乳」のときは「ぎゅうにゅう」と読んで教えてやればいいのです。それをあわせたりしてはよくありません。実在から離れた知識を与えると、子どもの頭が混乱し、かえって覚えにくくしてしまうのです。

それよりも子どものほうから、「この『牛』という字は、『牛乳』と同じ字じゃないの？」と気づくまで待つほうがいいでしょう。そうしてから、同じ字でも読み方がいろいろあることを教えてやればいいのです。自分から気づいたことは記憶に深く残るものです。